

# 学 位 請 求 論 文 要 旨

## 持続可能性日本語教育の実践研究

—中国の大学日本語教育における中上級専門科目の可能性—

2019年6月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

唐 曉煜

本研究のフィールドは、筆者の所属する大学における日本語の専門科目の授業で行った持続可能性教育の教育実践である。この教育実践の目的は、中国の大学における中上級の日本語専門科目への持続可能性日本語教育の提案である。持続可能性日本語教育とは、母語と目標言語である日本語の両言語を駆使して、グローバル化社会の直面する課題を自己を起点にして認識し、そこで如何に持続可能に生きるかを考えることを追求する日本語教育である。

現役の大学教員としての筆者は、グローバル化社会において直面する課題を自己を起点にして認識し、そこで自分は如何に持続可能に生きるかを考えることを追求する持続可能性教育の教室で、各受講生において、その追求がどのように具体的に達成されるか、その実態を、事例観察を通して明らかにすることを目的とする。合わせて、本研究が対象とする持続可能性日本語教育の実践において教師(筆者)はどのような教育実践上の問題に直面し、その問題はどのような問題として捉えられるのか、を明らかにした。つまり、持続可能性日本語教育の実践をその実践の参加者である学習者と教師の双方に焦点を当てて検討することにより、中国における大学日本語教育の中上級科専門目としての持続可能性日本語教育の可能性を探った。

具体的には、フィールドの学習者一人一人において、「自分」と「自分の生きる世界」との間に広がるモノ、コト、人を通じたつながりについての認識が学習の進行に伴いどのように変化するか、その変化を新たな意味の生成として捉え、その実態を事例観察により明らかにすることである。本研究は以下の7章から構成される。

第1章の序論では、まず筆者の研究動機を述べ、その次、日本語専攻生の置かれた現状として、グローバル化の進行による中国の社会的変動、その中に組み込まれた大学教育と日本語教育の現状を概観し、問題の所在を検討した。

続く第2章理論的枠組みでは、持続可能性日本語教育の理論的背景とされている言語生態学を取り上げ、概説をおこなう。また、意味の不在と言語の不全の関係、意味の生成と言語の保全の関係に着目して、生態学の意味の生成の重要性を述べる。次に、言語生態学の上に構築されている内容重視の言語教育としての持続可能性言語教育とはどのような言語教育なのかを説明する。

第3章先行研究では、言語生態学を理論的基盤として進められてきた言語の生態学的アプローチにおける実践研究及び生態学的リテラシーの養成を目指す実践研究を概観し、本研究の位置付

けを示す。

第4章研究目的と研究方法では、本研究の研究目的と研究課題を提示し、フィールド（実践）の概要とデータ収集、さらに分析方法を述べる。

本研究では、フィールドの受講生1ループ、4名の受講生を分析対象とし、雇用をテーマとする2回の連続した教室活動の対話的問題提起学習による振り返りテキストの記録及び、ロールレタリングテキストを分析データとした。この4名が、内外言語生態場の中の相互交渉の下で、どのように生態学的意味の生成という課題に取り組んだか、主客分析を援用して、その取り組みのプロセスを辿った。

第5章では結果と考察を述べた。分析対象とした4名の受講生は、同一授業を受け、同一グループで活動していたにもかかわらず、振り返りに観察された彼ら一人一人の内的言語生態場で進んでいた思考そして意味生成の過程には、さまざまな点で異同のあることが示された。教材や活動が同じであっても、学習者個々の取り組みや受け止めは違いがあることが明らかになった。これは、グローバル社会に生きる自分が直面するリスクを知り、そこでどう生きていくかを考えることを追求する持続可能性日本語教育の教室においては予測されることである。

雇用では、総合職として日本の一流デパートに就職し、上司のパワハラ・セクハラにより退職を余儀なくされたテキスト(まり子テキストと呼ぶ)や中国の国営企業に就職した女性が国営企業の民営化の流れで失職した女性のテキストなどを使って、職場の問題を取り上げ、その問題と自分との繋がりを探る活動を行った。

S は、最初、まり子の職場の問題を①<日本人→仕事とプライベートの区別がつかない>という日本人の問題だと捉え、まり子の職場の問題を自分とつなげて捉えることはしなかった。ところが、②高い自殺率という既有知識を思い出し、それと結びつけることで<日本での仕事→ストレスで生活不安>という自分にとってもリスクになることに気づき、自分とまり子の職場の問題のつながりが認識された。その後、③男女差別が激しく、それに甘んじている弱い日本人女性という日本のドラマから得た既有知識と結びつけて<男女不平等→女性の弱さ>として捉え、日本人女性が、自己主張ができず、弱いために起きた問題として、再度自分とまり子の職場の問題とのつながりが切り離され、他人事になった。最後に④<全ての仕事が大変→勉強して優秀になる

>と捉えた。つまり、S は、学生は勉強が一番という言説を用いて、まり子の問題を自分から切り離し、それ以上この問題で議論する意義を見失ったことが分かった。

他方、R は違うプロセスを辿った。最初、①R はまり子の職場の問題を上下関係に着目して「上司と部下の関係がうまくいっていない」と認識した。ここでは自分との関係は捉えられていない。次に、②権利擁護という自分の価値意識と結び付けることで、まり子の職場の問題を権利蹂躪の問題として捉え、自分だったら絶対無理として、自分との繋がりを捉えた。続いて、③まりこの職場の問題を自分のアルバイトの経験と結びつけて認識することで、「自分なら→長く働けない」という②をさらに強化し、「まりこの職場は不平等・不公平→平等・公平さを重視する自分にはそれは我慢できない」として、自分との繋がりを捉え返した。しかし、さらに視野を広げて、国際的視野からまりこの職場の問題を見ようとした時に、「日本人は暗い、上下関係を重視しすぎる」という日本人に対する既有知識に依拠して、まり子の職場の問題を日本独特の問題であり、普遍性をもたないと断じ、中国人であり日系企業で働かない自分とは関係がないと捉え、自分とのつながりが切れ、他人事になった。

他方、K は S や R とは違う過程を辿った。K は、まず、①まり子の職場の問題を学校教育で学んだ労働者の権利が蹂躪されている職場と捉えた。中立的な捉え方で自分との繋がりはない。次に、②自分だったどうかと問いを立て、自分はそのような職場では働かないと意志表明をし、自分との繋がりを捉えた。③次に、何故そうしたことが起きているのかについて働く人の関わりを問題にし、自分はどうするかを考え、首を覚悟で抵抗する可能性を考えた。最後に③学校教育では権利の重要性だけでなく、蹂躪されている現実を何故取り上げないかと疑問を投げかけた。

このように受講生の認識はそれぞれ違うと同時に、言語活動を通して（言語生態の保全）、自分の周囲に広がる繋がりを自分その中において捉え返すことで、自分なりの生きる方法を追求するという（人間生態の保全）が進んでいることが分かった。言語生態の保全と人間生態の保全が循環していること、それを教室活動が促していることが示されたと言える。

第6章では、第5章で受講生に焦点を当てて考察した持続可能性日本語教育の実践において教師(筆者)が直面した、特に、対話的問題提起学習とロールレタリングという教室活動のデザイン及び実施においてどのような課題に直面したかを検討した。

問題提起用の生のテキストに対してうろたえている受講生の表情に引っ張られて、教員(筆者)は、そうした教師のガイドの必要性を強く認識し、とっさに従来型の指導ストラテジーをとったという流れから、この論文執筆のために、教室での自らの言動をこのように言語化してはじめて、自身のこの矛盾した事態を筆者は認識することができた。また、受講生がまり子や IT が中途退職に追い込まれたことに対してそれほどの危機感を持っていないことに気づいた教員は、ロールプレイ、しかも IT の身内になって助言をするという設定のロールプレイをもってきた。しかし、その際、「現実をこの身で感じ取るような思考法の練習としてロールプレイ活動を教員は位置づけた」ことから分かるように、教員にとっては、ロールプレイもロールレタリングも思考法の練習とされており、学習者と共に持続可能な生き方を追求する場をデザインすることだと捉えられていないことがわかった。そこから、筆者にとって、同行者としての教師像の内在化や持続可能な生き方の追求を目標とする教室づくりは挑戦であったことがわかると同時に、それに直面し、教員の自省と実践による示唆を踏まえて今後の実践に移す可能性を論じた。

第7章結論では、まず、本研究で得られた知見をまとめ、次に、本研究の意義、最後に残された課題を述べた。

本研究を通じて、受講生が人間生態の不全状態から言語の不全状態に気づきその保全に向けて思考が広がったことであり、言語生態と人間生態の両方の保全・育成を図ることができた。また、生態学的意味の生成は行きつ戻りつしながら、つながりが見えたり消えたりしながら、その都度新たな意味が次から次へと精緻化され、概念のネットワークが形成されていくことが分かった。このように、物事を孤立状態と捉えず、一つ一つのつながりを築きながら、生態学的思考力が育成され、想像力の回復の傾向が見出されたと言える。さらに、実践者としての筆者が同行者としての歩みをもって、自分を対象化し自省した結果、どんな目標が達成されたか、なにがしきになったか明らかにされた。

このような教育実践を対象化し研究するにあたり、今後の実践に臨む様々の示唆をされており、さらに「教師に焦点化した研究」、「今回の実践を対象としてさらなる研究」、「新たな実践研究」という必要とされる今後の課題が残されたことがわかる。